



附  
念  
入  
心  
表  
算

特 別  
14  
3157  
6



14  
3157  
6

索引 蔓 自序

俳諧の書いふ一より少くは多し  
少くも附合乃意味もとあふ書籍の  
少くはわきまなくいふもあふ  
垣根のくろく會一席をのほけ  
議論をゆすむるをさ而しては  
自得効破一とめく能証をたす

第一

さうしと不幸に………  
は事として自己の誤を正しむの便なり却る  
他の癖論惑説を………  
あ………師を………  
修………自然と………  
あ………凡………  
師………造化を………

ある………又附合と………  
法式を擬………  
古風乃格調………  
繩墨を………  
興………  
か………  
近………蕉門乃附合………

支流をめぐりて門戸を建己う好みは  
是とて其好むを一概に或はみな  
一粟を以て向と乃一海とてあるは  
山崖を以て老成のしりりと其の意旨  
廣くを以て謂つるは然も大概蕉翁  
一世の集の鑿とて其の傲ふもの  
おもて其規則とすや十七條廿五條

或ハ七名八体うやむやの閑考の事によりて  
学んてとて墨子う練糸り泣揚子の  
岐路りて迷ふの徒少く後故ふこの拳  
子及ふ今や此篇現在に作者の句を  
古事此名目りて引用し又をみりて  
作するともい海く句を以て連続  
乃趣を志し加ふ古人の句を以て

しき適意に令けりものなるをこれを用  
すべく社中乃初心輩に附与乃心澄  
示候とありしと他門より向て論交を  
うへ候とありしとあり

萩半亭几董稿

ある日他心の友人某ありて附合のてい  
きこひし乃小冊子を出しし其のに  
見えし懐にありしと又心  
かへりありあきしと余り  
信乃其書ありしと他心を懐  
いしと余りしと余りしと  
たしとすのしと終りしと

いふことありておぼしき師に隠く仇讐とてまふべしと  
物く卿を傷くををまふとあま進く形を  
深く致すよかすりてこわを好するはく時  
師曰け稿や必他見ふとて致す一予の所を  
議論し筆を中しは母を以て終すも女を執  
はるる一母とてわをよぶものと扱ふは致す  
みそのにまはるるをいふは書とて大集といふ

志のあはれと余の今蕉門乃仇讐也  
新の心とて母其筆をよまはるる人  
五指とて屈するは後終るは書や物  
まはるる心とてまはるる心とてい  
まはるる心とてまはるる心とてい  
見せしめりておぼしき師に隠く仇讐とて  
まはるる心とてまはるる心とてい  
まはるる心とてまはるる心とてい

三十棒もよみぬ〜いふ〜いふ〜いふ〜いふ〜  
棒ひふ乃む棒ひふ乃むの如〜

汲古堂佳棠誌

天明丙午歲正月敬旦をき音

古来名目 并私説

○癸句 天

○服 地

○才三 人

○癸句 起

○服 兼

○才三 轉

○才四 合

○癸句 客

○服 主

○才三 相伴

○才四 庖下リマノリ

私說

○癸句 有心 ○服 有心 ○才三 會叙

○才四 逃句

○癸句 景氣 或向 ○服 景氣 或向 ○才三 人情 或手前

○才四 人情 或手前

○癸句 人情 或自 ○服 景氣 或他 ○才三 景氣 或他

○才四 人情 或自 ○才五 人情 或自

○癸句 景氣 或用 ○服 起情 或体用 ○才三 人情 或体

○才四 景氣 或体用 ○才五 起情 或体

右



古来名目五照

○相對

○比

○對

○打漆

○打着

同 附物趣向新古之差別

○涼 川端 古

拭椽 中古

鶴脚 新

○暑 小松原 曰

絛縮緬 曰

笠籠 曰

○寒 醉醒 曰

竈塗立 曰

塩鯛 曰



古<sub>人</sub>曰 物 一之照ハ韻字首字之なる法をまて

後句ふよりそもふ事あるもよき事なり

もよき事なり後句ふつひ終せしむる山川草木

多々歎乃終ひをまて後句の景情を揚と

すゝめと云

古<sub>人</sub>曰 照ハ字首よりまてつひハ是も歌一首乃

ごとく一句註とてんかめと終とまてよき事なり

く一首のこくこぬるを眼の姿とて  
移け境を志移く

古人曰  
一才之八発句一何をも平句一何をも  
一旬乃はまごぢひあるゆて「ん」は  
「は」四ツ乃はふ葉とてん

古人曰  
一才之の節と文字の定るゆて一句の  
後句乃やうなる種とて下のまの  
次乃句へ及ぶもあはれを志する  
ての字「ぬ」の字もあはれを志する  
されとけ句と才とのまの句の中よ  
あはれも推せぬかよの才とけを  
あはれはまの才とけを志する

昔より中身の韻字を留りて傳受のりて  
或ハ初極或ハ杜絶をこりてひと押字  
抱字を結法あるハ志々ぬ人乃推考

私説

発句は起まる臥眼子表く二句首尾一  
より一その体ありて一句の論をこまらたあり  
されどワキの留も韻字の子余考

拍は尾調を眼の法に於て  
中身の案又ありて句を起すと  
既ワキと前句のり又あると  
亦越へると一轉へて意のり  
ゆゑぬやうに志も発句眼と二句  
を尾調ひてを附出ゆくと  
且中身のりてと連続

○ 然たれをぬり乃又字く意味あり  
さきハ才三の句を一喜のむつし既所  
ととつあて勿論口キ才之乃仕法をよく  
熟得すきハ附句ハ百句も千句も進ふ  
秘な事形ハあふふとつて照さうさ  
才之あ一喜ハ一喜はそ尾も調ハ  
と知る一ハ中もさくは二句乃附  
ワリをよく修めして附句の自在を  
得るをよみこ

古来八体之名目

- 寄      ○ 志      ○ 觀相      ○ 打返
- 欺      ○ 前句乃情を押し出す句
- 詞をとる句      ○ 意氣

同 案方七名

○有心 ○向附 ○起情 ○會尺

○逃句 ○拍子 ○色立

同 附方八體

○其人 ○其場 ○其時 ○天相

○觀相 ○時分 ○時節 ○面影

同 三体

○有心 ○會釋 ○逃句

同 取啣音五字

○份 ○感 ○香

○移 ○勤

同 八句之運

○見之 ○聞之 ○思之

○行之

私説

一前ふ自他体用人情景氣のわつらをもて  
及花句より分四句五句乃至各自より一巻乃  
連続四五句乃運ひ此法をもてよくたゞ  
るまゝとて或る巻中人情乃句をもて  
景氣乃句と換へたり景氣乃句と  
りて人情の句と挿へたるはよく  
是を信よ観るにまじく禁忌

も多し或る事ハ人情二句景氣二句と纏  
筋を織る如く一巻は連続する事  
あり一巻はたゞの如しとて或る事  
よ曲節の事一巻は景氣乃句出  
是非二句對して次は人情起情の句  
待て候とて信よ延及法も又

人情二句對——を次ニ句と見ざる時ハ彼  
向附乃法をとて自他を分ちし程人事  
四句も五句も續けゆく——さうと乃  
曲即を用ひまらんハ一巻の眼目とする所  
なまに似るも既古集に人情五六句  
續くもさる考りあるを——

又曰

景氣の句とつくと見聞思行乃文字  
あまハ是人事と拍とつくとおこしと  
忌憚るるゆゑを句おもよるるべきと花  
少のひかしくき次との句みを見聞と  
者もハね——あしくは是を以て世と  
附合穿鑿論——さあそ一巻の調子を  
う——まする——句乃情あり作者乃意

あり景氣と見ゆる句と情の句の字  
 情と見ゆる句と景の句の字はさう  
 よく見解して編するべきものたゞ  
 昔物終双葉の拍をくじ地の詞といふ  
 をもて志の終へるに附合の一書ハ能物  
 と上より綴ると心はくまもさく一助  
 ありは

右の挙る私説乃ハ古人の糟粕  
 一書ありては採乃功なり  
 尤も記述とてありありたる古事  
 名目よりして句を引き解するに要  
 する一書無飯名を加へて考へ  
 手引乃要とて次を採て能物終遠乃



人書りて終るのあはれこそ初字素  
孫の法乃もあふいさくの便あはむる  
御心ふのこも一他見くわくを此  
詞をもて全編乃之意をさくくま  
しくあらず一志をさけりやの目

五段句よりワキ附事

世々の羽もい法くらひぬ初時節  
ひとふさ風の木葉ふたふさ

五段句初一うれハ野ふく世々々  
あはれをこねるい法くらひ羽とき  
う句能く

ワキハ

初時節一吹風と附く初本葉

つわのさきくの結ひあはくきしきとせし  
うははくらふとつわのあはくきとせし  
一白は能く

是う打添とふふ照く

市中ハ物のよほらや夏の目

暑くくと門くの芭

発句ハ夏乃月う懸く市中ら懸向あし  
物のあはくきとせしう懸向と懸乃月あお

あらしうむききさの句能く

照ハ

暑くくとつわのあはくきとせし  
二句結問のあはくきとせし  
とせしとせし芭ハ物のあはくきとせし  
あはくきとせし芭ハ物のあはくきとせし

是其場し

唐の志の心はまはるる

酒志の習ふこのちる思自

け祭句ハ海川乃おと懸して接授<sup>アサツ</sup>乃

句くしんえりキも接授の口キと是らハ

接授<sup>アサツ</sup>のとまよのよい本なり板解<sup>カイ</sup>ハ

此は板<sup>イタ</sup>とにせし唐のねたきと海川

との静かなるもは昔承<sup>ウケ</sup>たまはるる

かゝるおとるいさ

うけり口キは日ゝ酒を志あつた

りて専主なりハ板<sup>イタ</sup>と遠事<sup>トウジ</sup>の板<sup>イタ</sup>は

かゝる後ハ志をすめりおとる

さるるおとる助字<sup>トヨビ</sup>乃月<sup>ツキ</sup>は

季は事めりおとる物<sup>モノ</sup>は月<sup>ツキ</sup>乃板

あらた板<sup>イタ</sup>とあつた助字<sup>トヨビ</sup>のちあつた

及非句如唇くりむすむいもい

是相對とらふ脇と

言葉のよめ月をある日と西と

山もとちとく路が路と

けりキハ只粉骨もやふ句のやうにさうめんハ

おにもふ句如りさ神ともいぬ句と玉振かき

とりキニ月をある日と西と

言葉のよめ日如れ七ツ時分とはとれ十日

はとらんく月もさうにうらうらとある

とらんくあう一めん一言葉のぬのむはうら

およよめのもねふとさうあるや西とああ

カミラダラス  
回歌さ偏阿事らり口キみけの字を用心

手撫さうと事とや一旬と東と西と

○  
十  
五  
と終体は山もく附くが終は葉乃  
おのりらしき

是も亦添まゝ時分附と

牡丹あゝく亦のりぬ二三片

卯月廿日乃ありぬの彩

祭句ハ牡丹乃濃美<sup>ユカヒ</sup>ナ<sup>ヒ</sup>終を体とく

やゝのりひらる花の二つと三つ  
を亦まゝりぬとこの終二三片とく  
ふまゝ終も亦この題の牡丹は五つを  
終句とワキハ

その時終を定めぬ卯月乃廿日は  
この祭句の足はくくは終の終と又  
時分を定めぬ牡丹のりは亦な



字が一句乃眼目とや ニヒクミ メ ノ ミ メ ト ヤ ワ キ ハ

けもイもつらまなれたま書のよめくたしくハ  
我らうりもとさくも又何とくもまらく  
まてくてもあーめ書くやとすつあお  
あうのつあもまこさうあと カン カイ ノ ヒ キ ト  
句にあうまハ声あけかきの下田書くワキを  
字田よまらくつあも ノ ヒ キ ト ノ ヒ キ ト ノ ヒ キ ト ノ ヒ キ ト

け白ちささききかきと詞を好くられと  
ゆのようく田りまをれを詞かくつは二句  
そ尾しそ漢と是等まらくまらく  
ころぬろといふ合占くくつらうと

是も相對乃ワキみえ附ハ有心こ

みまら月骨コツ髓スイ入イ夜ヤ

妹句老杜ハラダウキハ

十七

あけ白ハ月如きリハのまゝとあややうに  
おろしき枯きハ本乃はくくとあつと  
たつらぬ趣向ハと月のひつらと昔昔  
下志むや那ハおふやとふも昔昔  
能く透ハふたつりぬるゆへにや

ウキハ

あつらぬのめりあ白乃ハ系ふも情もあ  
つふおあハ一句如風骨ハ杜子美乃  
能く詩をかんやハたもと発句と称ハふとあ  
ウキの趣向ハとまゝとつらと老杜ハ  
詩腸ハと季節乃ハ金ハ人ハ下志ハものドハや  
是等古格ハのウキハまゝハ懐能ハのうハまハて  
ちねもいハをぬハとハあハ

十八



次韻乃俳諧

漢の足雉脰キジノ長く継ぎて

這句コノ以モツテ莊子シラ呼レ見ル矣

とてを例ひてくまるとのそ

一或ハ古人の発句を互々照より附ツくめと  
まると俳諧あるはハ公昭起るといふ

花のはやくあるまゝ五日ある 古人

その花はんとする袖の春雨

け敷句ハもともや急ハくもくはあはれ  
よまゝにやして四五日もまゝあつてあるけ敷  
四月はあましくはあつてはどのやまの風情  
あつてあつと花のさふはもめてまをほく  
おもひ残きく一句の懸向かり五日のふ

頼り何も理屈はなし

ワキハミの事情はこうくわん達もさう  
世間ごとくやうな事をいふに及ぶ人々  
形はこう思ふくわんを扱扱  
少くやせてゐればとあるが現をいふ又日  
わんもたまにはいふ事にはあつてその  
るゆゑに花とさへ我の心さうくと感懐

と頼り今さら神をぬくは半一やと頼り  
く神の事柄と結ひさうのく花のわん字  
春のわん字を教へてあつてわんがと頼りも  
その二字をさういふと頼り乃体と  
うれとわんから頼りのわんは教へて  
ある文字を用ひさうのわんは現を  
乃んと古人のわんをさういふわんを

心しききききき

又羨慕の句なと心しく羨慕の句を  
新縁と云く下り御乃字を志す  
初ワキと羨慕のぬしき次くを  
つちかひきても発句を祢の句と心け  
ワキよき心発句ひく作るこそく是も

先口キ起リ口前又夢想祝言奉納の  
歌よハ発句乃留りよりワキ乃以字ハ  
五音相通十韻連声など用ひく附家  
事ハ心時の宗匠乃意よ何と云よ

発句眼子分三附事

意気やけり子孫も心事  
心をめてたしおすころ乃松

海士乃子々録を告る貝吹て

癸丑句ハ炉を過りて旅人をとりてたす体る事ハ  
ワキナシ添へて庭のあしを附きり  
相才ニハその二句ヲ向ハシテ蘇を告る  
貝を以て書の手ゆると他より事と起  
て前乃句を海邊に乃蘇添と刃はく附  
しやかゝる事ハ起しゆく由く  
轉して事ある

是向附

本のりくくけも勝色はちり  
西日乃くくまよとさそま

蘇人の乳くまゆく事者

癸丑句ハ急乃もくく遊ひく計りも  
みことと系色紙賞歎しふ事添へ  
西日を用ふと時分を定るくつ流し

バキシ 久くさうひかりのときけさまのやう  
あつらふさ、たうく、さ乃ちるらうん

けうを照し合さく見せはいよく

おとろいぬすの西日といひを果たさ

たふぬの時節よく情を起して旅人さう

勢向さく風搔カキゆくと地をまめぬ安ん

あつハハ春さほそと季節を動さぬ

よく附さるゝや是等々の百句は中よ

有くも才こととんくさうとてみふ

け敷句たつハ正しく人事うめても

景と氣を詮ふく句に口キハ事始

まじは句ぬきと才之を延して

いてハ却らふんかきくさうんひ

志のうりと人を止る物さうん

やちり起情乃附さぬ

啼くも風を吹く雪を産る也  
鳥帽子を垂す梅ひくとむる

山を焼くぬきくは着替て

あま句をま風に向く雪を産の上る雪を産

照く情を起くあま句を産に雪を産

鳥帽子を垂すや淑女をあく梅一む

と場をよみ海を産く板才之急印と垂る

人をもとめく離宮たどくおとひよとく

清々廉すくとも附くけ才三一句の作

つひ趣向のとも亦上りおとけ

是其人乃附

温石さめく皆もあま

け燈乃おとけ志む海山小

け癸句ハ其角う翁を葬りもる哀傷乃

吟こけきまをきとけく温石さめく  
 つひ皆氷る色く諸門人乃新腸タニチヤウを  
 述るもとの死才三一轉く旅泊を附  
 半ふふりおりのふけの一体をまよふ  
 ぬもへはまふふんはく趣向をとくおま  
 ちくも海山くく二勺の伝き才のち扱  
 是附ハ舎尺と  
あまのつとけきま  
 有心なれをこ

やうきくもまのちあ教のよを紙  
 本槿乃外も垣乃間引菜  
 新乃魚部ハ月不用ゆん

癸丑句ハ秋風よ破るる芭蕉をあたは  
 くまの葉敷と伝きく本槿の垣と場  
 をよせ合でく間引菜と洒落イヤラクでく  
 一句の伝くや相中と垣乃外面の葉をけ

少少の場々一人情紙起してあつた  
 通を海邊にまゝく漢<sup>スナハリ</sup>でゝゝやが都の  
 かゝるそとと月はお遊々用中んと  
 遠く思ひやうと句こゝろまゝか三の  
 るり乃て句へ及まおとむまを合点  
 くのまゝ

文字苗才三の事

事自や鬱のはくく並ひる  
 其乃の朝日乃あられにたり

桎梏山家乃体をも本葉降

爰句ハ鬱のイニ並ひあゝま  
タレ、及

口キあまれにけつまゝと云まゝとて勸字

ちく苗ちくちりよく納るて此中三

苗うよのほのちくハ三句乃わらりおま



ろくたのそ 後句 新月 やとみい ワキ  
そ乃 新白と出たり 新<sup>カワ</sup> 二句一意の如く  
そ尾 一と才之は 附合をく 白ひもを  
不 此を何うふ 新白とつ 字よたより  
櫻 捨るふ 常 如き本を あらひ 山家の  
体と本乃 新白と 一句一 如きとめさる  
斗ハ才之の 如り 瓜 結く 留りもめり  
く

三句乃 櫻捨もさく 調り 櫻捨く  
下ふ 本乃 新白とつ 字よたより

卷中連絡の事

前山田乃小田の子稻を川比

夕月子かたれをわさる 四十雀

是ハ景氣を延きとつ 附か の八 体ヨ 曰



是く情之句はわさる附く前句はましく人の  
用くこと相とるるく由を林くもくこと物  
を注る事ありし人付く用とるけ  
及句は油くましく懸向とるましく一句の能く  
疎ふことふの事と起して事なるや  
是七名は日向附く  
疎ふと備く………

三尺は………

是ハ油より事………  
三尺は………

是七名は曰會尺と

三尺は………

餌は………

鬼脣乃妻の只な………

是前句ハ三尺乃雪とらて餅も創ケタモり  
極句は句ハ日多しと見とて思ふんと句  
他を結ぶものや次乃句ハ前を拈人と  
んを其妻を向ハしと鬼層とて極句  
ハ拈くとのよせと只法よふくと情を起し  
とと商賣と教生とてすもゆくと扱角も  
けやうかかてつら志とね扱も歎ハしと

いやはいしり節をさして泣くある体

是前句を吟ふと情の向附

いづちの妻は只ハハハハ

カ子 障子 障子ある花のみとてに髪きり

是も人情の句よけとておくの人のまこと  
前句のらと妻とて妻の用と自みとて  
附くまといや扱一句拈起向といふらと

支離<sup>カメワ</sup>乃女を足めくくまき世の申もあは  
果くく交有乃罪障<sup>サイヤウ</sup>消滅<sup>セウメツ</sup>乃くめ障の供養  
ふありく世をあらくして尼も成とふふ立息と  
叔姑句まへハ花の定なきとあくりく是非も  
花乃句をときねをきくぬれと然とも前句より  
情滅起しくくまき世をあらくして障の供養  
とくくも何く附のまうもたふやちうと

く人の情を附ひてなまぬとくく障供養と  
く花をよせあをきくまのやよひとむの  
く中とと山ちるまの意乃ち起も自然  
と余情とくく世とく花の句ふるやう  
はくくハ花の四等とくくはくめく句能の雨  
又きふ骨おそ

是案ハ七名有有心に附ハ其人

○ 清浄ある花の、、、、、、、

まがねゆく東乃西よむふく

終堂後の弦きうはむとらうふ

是前句を清浄佐土の志乃ちまの夕暮と

との、まゝ、附流、さる途句に

次ハあまの白をさるまゝ西海、<sup>冬</sup>深ハ

一、まがね乃面影は附さるの、やまのちま

とひふ、まゝむをかくと白と結ひ、前句  
乃機端を合さるとつまの、や

是系系お流、附ハ八俣、白付と

○

前日ハさ、ぬく、又あま降

刃、まの児福り出よ堂侍養

是前句日ハさ、ふく、又まがねのうはま



婦くつらねむしを一句自他へつめりや  
人悟ふことつらむいふ所へあはれを晴ハ  
こふゆさ句

是一句自他のも有心附く

はかりよけさるゝゝゝゝゝゝゝ

いさよひの暗なむらさく世の我ま

は附くこよくあうてかふるよひかへれ句ハ

児移りあふこころもく只を物結くみ  
乃こ其まじつらむさる人と附く一句の  
お返をさるる其く向へて晴さひま  
さく世のこそ起とくうらとみく髪よめあり  
く件をあはれ物や世のこそ起とらふ  
くく三句の輪廻をのづらこ世乃字うちるま  
是前句乃情を押し及と日附みく



又時分をばくめく轉く

十六あめくく転く

志くろくく山かぬき場松り

志くろくくまぬくくき場松本は津とせ

乃橋く附くくくくの園く世乃い

くくくとめくく暮砧ホキニイタハシ急イサたどのおもひ

砧を附物くはくくくく今く

是八体よ日其時節

志くろくく山かぬく

駕舁の楳継きくぬ秋乃雨

前句乃場をえんはくくめく加馬舁く

楳継きくぬハ前句移をとり

くやぬの由ハ季節のあ

二句乃よきほひ



是前句も昔を好むくおとひて草  
たき紙をくぬきくたす体をたぬく  
みく人なるの今ハ世を道通く都通ま  
るさうま候るありさゆくとてく次を海  
く物くや 附ハ其人く

二乃尼のをまゝくくく

七ツ限乃門設くさる

前句尼といふく寺と慈向とさめ七ツ限く  
門をとまきすくくくく一句は能く

是ハ體よ白く場く

喉くくおの  
情をたきく

七ツ限く門くくくく

雨のむすふ<sup>ス</sup>救<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>糶<sup>カ</sup>やおくりまぬ

前句七ツ限く人を通さぬ門とつて對  
て軍用乃糧と慈向く物と雨の間く

くくく一句の地くくく

るの心まふくくくく

弾ツマミたーくく能也の酒人

前句乃救軍を軍子勢多氏浦人くく定

めく弾たくと舞く用急せく軍中結

舞く能也と思ひよくくくく一句の地く

結る一句乃地るま句と前句の結る或ハ前の

海くくくくくく一句くくくく

け一編おほくく一句結地くくくく

くくく考くくく

弾ツマミくくくく

女振乃海くくくくく

前舞くくくく人氏舞くくく

舞物を定めくくくく

情をよもせとんてさく涙を枯らう一句  
乃能し

是案方ハ有心を附ハ生類乃會尺し

女梳乃、、、、、、、、、、、

是類子か、於髪ヒニのぬく

前句乃、、、、、、、、、、、

拙と見也モリ相イハ好ケたふナおヤ怒ル、又女也

趣向一 是類「髪のみ、ぬくの、まゝ、涙を

一、乃能、、、、、、、、、、、

髪ヒニのヒニ、、、、、、、、、、、

多く、、、、、、、、、、、

是も附ハ起情し 前句人情ナキニ

福、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、

前句乃人をさしつゝと語氣働  
るを返すかた代紙すかへはる人を  
對し附とゆや或難して曰は二句空語  
より自のゆに云あつとめんとあつと  
所体よりさへぬる詞る事二句より自他  
ありと答依りつゝとつゝと自方もあつ  
つゝあつとをよくとつゝとあつと

せしとあつと依體の附句よりんとあつと  
ふしとあつとを以彼中古の連てあつと  
乃とあつとを嫌ふ事と

是前句乃詞をあらとあつと  
向附



前 頭痛を患ふは連日之類

鄙人乃妻よりはり詠の事

前句を乃日のぬくくと暖ふふ公の樂  
むゆもなく既もおもく井戸のくくん  
めくく修徳お女するの田々もあまは流石さめく  
きと死ふへ連らぬく去る様中乃作こ  
是附ハ甚人より王昭君するの侍と  
鄙人のめふ、、、、、  
水より流り酒屋一軒

シハウレン  
芝の種シハウレンの棚はお前の窓の窓

前句ハ赤あけ旅伴と其場を附く白蛇  
越回々流氷より多くの家乃流氷一中に  
うぐい一軒流り酒屋のある体なり  
次の句々を流氷は現在をよ一と夜明  
かふふやうく水も引掛くまういさふ流氷  
流り一家庭乃さすこと返して流氷と電

乃より一鳴きし、詠句に桐みとよみおの  
の詠ともし、一句乃能く

是ハ体ヨ日時分附シ

そよ神乃極よ、、、、、

半木の書の花掃抽くや

是之前句乃おのり時分をよみおのり詠めし  
半木の書は使と詠句は定まれば後あるや

体と一句、使とよめば

そよふ乃お掃、、、

保昌、住も半やるあらん

此一句保昌ハ丹後乃國のちもあがりて下り  
く、や昔ハ一任とつめく三年あらん  
へ却りて必ちよかして巻ハはらう、

附の意ハ前句の半木の書は使を丹後



よらとありていふは保昌の任むるは後向  
よらとありて前句よらとありては白化を  
もきひくまはるるはとまはるるは  
は句の苗とよらとありては  
定りたる法のぬりて勿論一句他の  
物体このやうな趣向の所や人を  
てー定りたる法とぬりて只前句をよらと

又くまはるるは保昌の任むるは  
ちひ身事とぬりては前句の  
丹後が何とまはるるは保昌と  
よらとありては保昌の任むるは  
ま用の出物とぬりては保昌の任むるは  
是前句の任むるは保昌の任むるは

前いづら花白し山吹乃後

むら雨の垣植をくはあまきり

ニツよるそんえはあまきり

前句ハあまきり花白し山吹乃後

結ハむら雨と一句ハ花白とく雨降る時候の

今句ハ次乃付ハ起情ノ前一句ハ雪氣を延

し事とくもあまきり人情を向リ後也

ふあゆら花白し山吹乃後

垣を飛越えくはあまきり

是七名よる柏子花白し

ニツよるそんえはあまきり

西國のよるけり小日花白し

前句花白しはあまきり

はあまきり西國向屋かよる名あまきり

おもむきありて附る

是其場也

西玉乃多歌、

分ちて其葉の足もやま

前句問屋のおもて口乃日多母らとら返

葉其秋をもぬらけり、秋風も足もやまゆくと

也、

乃能く、

是時分附也

ちりり葉葉の、

片側ハ、

前句の一体を足はく、

片り町と、

くおあ、

起二句乃らるる一絶情を

是時候乃景色附之

片らりく世川、くくくくく

月乃おぼろのまを稲妻

前句世川乃秋風とつふ時情を又込て

月乃おぼろりと秋風の稲妻の層をさるり

る一巧をさるりと世川一絶句の句能く

是ハ体ヨ曰天象也

月のおぼろくくくくくく

作きんくく人か車冷くく

前句乃系文をくくくく秋の初めを

くく体も系文持くく車と絶句を定め

あとのおぼろくくくくくく情を記す

是前句の感をも法を附ハ起情也

作まらんとく、く、く、く、く、く

今やお國の碌ロクく、く、く、く、く、

前句人形ナガサキの車クルマと、く、く、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

お島乃碌ロクく、く、く、く、く、く、く、

是前句乃ノ情シヅメを、押出オシデス、く、く、く、く、

今やお島乃、く、く、く、く、く、く、

流ナガく、く、く、く、く、く、く、く、  
眠ネム窟ツツミの、く、

壺ヒツシ乃花の、く、く、く、く、く、

あ、く、く、の、く、く、碌ロクを、く、く、く、く、く、く、

く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

叔阿アサヒ修シユ羅ラ維イハ、く、く、く、く、く、く、

か、く、酒サケ吞ツクま、く、く、く、く、く、く、く、

の、敷シキ衣イ半ハン々々、清スガ草クサ、く、く、く、く、く、く、

おかしのほろりかんく〜次は物のさへ  
 さらぬ酒を酔ぬ〜うま〜蘇入〜  
 人の枕もなぶる雍庵のけさる様乃志の  
 と我らの心を超へ〜附〜の〜や初  
 前句の賦を〜観〜つ〜流〜れ〜女〜と〜の  
 多〜く〜懐〜ね〜る〜く〜初〜の〜心〜ん〜と〜す〜終  
 てもかゝる毒のしち〜る〜侍〜志〜の〜心〜〜〜〜と〜あ

か〜る〜ま〜し〜心〜お〜さ〜ら〜る〜も〜れ〜く〜余〜情〜を〜通〜句〜の  
 附〜を〜功〜者〜の〜う〜〜お〜〜〜〜ハ〜出〜す〜ま〜ぬ〜と〜い〜ふ〜ハ  
 け〜や〜〜お〜ま〜ま〜と〜い〜や〜〜蕉〜門〜の〜附〜句〜を〜ま〜ぬ  
 そのまゝ女曹おま〜ぬ〜ぬ〜け〜く〜附〜ハ〜と〜い〜ふ  
 心〜や〜一〜句〜を〜何〜く〜も〜か〜ん〜句〜〜や〜と〜い〜ふ〜は  
 白〜〜〜の〜ま〜ま〜ま〜と〜い〜く〜ま〜〜ぬ〜を〜附〜合〜の〜悦〜遊  
 乃よいのを〜見〜て〜も〜合〜占〜つ〜も〜う〜ぬ〜し

右以上連絡の解ハ概すもくのまゝの  
二巻より撰出し引用も全公編ハの  
集証思し合を思し考す

名所地名遠附乃事

前  
ふ紙は都の連なりまつけ  
る大けし之井の隣

又

いせの喜段も忘れらる

難波江に風むくとき月形舟

附くもちうくこんちやとちうぞ一ツハ  
吟一ツを記す

○豊直語乃事

海棠乃花志行る浪皿

花の陰は海棠の枝まわりちり

前句ハ海棠の字を根四よ志りりとも書ふ  
後句ハ花の陰は海棠ハ枝と前カちりとも  
ありさるしおハ海棠の花みことつひ陰を  
海棠の前枝をひさの陰とつてハ根  
の外の樹こそこく正花をひく  
からくハ海棠のちかりめ

一句乃中に花の字根の字をきよく句も花と  
根とをひくハ花の字をひく  
正花よめこきと

世乃花よおとけく一本山さる

是世の意ハるまに山さるハ現在こ

るめりる花乃山口さるハ花さる

是花の山ハ俤し初さるハ花さる



又

花のほろろくもせむる志のあり

せむる志のつこし人 群るを

前ハ志の盡なるとに所とく遊山一とて足跡ハ  
いふも太平の法代ことつとて句と後句と  
共らぬけといふもたをその以代ハ志の  
ありと 語をささる人 群るをせむる志返一

て民の 怨心 を 謝と 拍と やまの 心も け句ハ  
あけ句 ねまハ 心よく せむる 後を用ひて  
○初雲の月より 秋之句 けも 花の 産  
うつる 時と 花前 秋の 句に せむる 心  
事一 形り

露 雲 雁 麻 相 樸 ちの 影心

秋の 心も 雲の 心も 雁の 心も 麻の 心も 相の 心も 樸の 心も ちの 心も 影の 心も

むすむの翁くわはく  
又きの翁くまを附ゆく  
あはれ翁く他の季を附出  
前白をよく刀遊く  
やうく

○花前子名月出

其角集花摘乃巻

名月日酒むく人

かくや娘くをむく花あり

前白酒むく人  
娘あり  
上  
抽  
あ

才女はもと帝より二人のゆきまをきハ  
はまきちりしゆきも終に羽衣をきき  
車よきゆきと天上にありきゆきと花より  
了る一白ゆきゆきとゆきハゆきゆき今  
未ゆき乃附白ゆきゆきゆきゆきゆき  
乃ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

汲古堂新刻俳書目録

附合手引蔓後篇

近刻

芭蕉其角嵐雪点印論

桃青二十歌仙

蕉村癸句集 初篇

ゆきゆき二哥仙

續一夜松前後二篇

新雜談集

和漢木屑籠

一書四奇仙後篇

花洛日紀行

其角十牛圖画賀

蕪翁終焉記

平安書林

近刻

近刻

近刻

近刻

井筒屋庄兵衛  
田中 莊兵衛

長田家

